

2011 October No.212  
百万石蝶談会

翔



## チッチゼミの産卵に遭遇

浅地 哲也

2011年9月10日に金沢市卯辰山にて、チッチゼミの産卵に遭遇したので報告する。オスの鳴き声は耳にすることがあるが、鳴き声を頼りに探しても位置を特定する事が非常に難しい鳴き声であること、体長も沖縄を除くと国内最小種であることも本種との対面を難しいものとしている。しかしながら、産卵はツツジなどの低木に行なわれる事が知られており、うまくいけば産卵行動に出会うチャンスがない事もない。抜殻が見つまっている現場に何度も足を運んだが、そう簡単に本種には出合えず、その予感も無かった。

ついにその時がやって来た。何度もシャッターを切る。少々暗い環境であり、手が震えているのかピンボケを連発する。ようやく、うれしい虫の記録を残す事ができた。

2011年9月10日 石川県金沢市卯辰山 チッチゼミ 1♀目撃 浅地哲也



《あさじ てつや 〒921-8021 金沢市御影町26-7》

## 白山ハイマツ帯でコエゾゼミを観察

松井正人・三坂岳應

筆者らは、白山のハイマツ帯で鳴くコエゾゼミを観察したので報告する。松井は、室堂平の標高2450m付近で鳴く声を、12時、13時、15時30分頃に聞き、三坂は、御前峰の標高2650m付近で、登山道脇のハイマツに止まって鳴く本種を12時頃に目撃した。

2011年8月8日 石川県白山市白山室堂平(標高2450m) コエゾゼミ 声 松井正人

2011年8月29日 石川県白山市白山御前峰(標高2650m) コエゾゼミ 1♂目撃 三坂岳應

2011年は、エゾゼミ類が大発生したようで、普段は全く声を聞かないような場所でも、エゾゼミ類の声を多数聞くことができた。三坂は、登山中ずっとエゾゼミ類の鳴き声を聞いており、松井は、登山口の標高1200mにある別当出合駐車場で鳴いていた声、観光新道の殿が池ヒュッテから馬のたてがみにかけて鳴いていた声を録音し、音声分析ソフト(Avisoft-SASLab Light)で調べたところコエゾゼミだったので、駐車場がある1200m付近から御前峰の2650mにかけてコエゾゼミが鳴いていたと思われる。



標高2650mのハイマツ帯で鳴くコエゾゼミ

2011年8月29日 三坂岳應 撮影

《まつい まさと 920-3121 金沢市大場町東871-15》

《みさか がくおう 921-8031 金沢市野町1-2-8》

### 表紙のむし -チッチゼミ-

少年時代、夏休みの昆虫採集となるとクワガタとカブト、セミの仲間が定番だった。アブラ、ミンミン、ヒグラシ、、、もう一つ欲しいセミが「チッチ」。鳴き声のする方向を、どれだけ探しても見つからない幻のセミ「チッチ」。本種は、どうしても得られなかった謎のセミとなった。今になって、その謎を少しずつ解き明かそうとしている。

浅地哲也

## バリ・スラウェシ撮影紀行（上）

松田俊郎

2011年の1月中旬、与那国ホンダの西條さんから、「4月10日頃から1週間位、バリ島とスラウェシへ行きませんか？」と、電話があった。実は、昨年10月に与那国を訪れた折に、西條さんに、「次は外国、できれば東南アジア方面へ行きたいのだけど、一人では不安なので、もし西條さんが行かれるなら、一緒に行くので連絡して下さい。」と頼んで来ていたのである。西條さんの電話にOKの返事をして、電話を切った後、「バリ、スラウェシというと、確か赤道直下の島だったはず、熱帯では、どんな蝶が見られるのだろうか？」と期待に胸が膨らむのであった。

このバリ・スラウェシ行には、西條さんと私の他に、京都の森さん、横浜の山本さんが一緒に参加することになった。話を伺うと、山本さんは前回にタイ、森さんは前回にアラスカと、お二人とも蝶を求めているいろいろな国へ行かれているようだ。西條さんも、東南アジア方面へは何度も行かれているようだ。

後日、西條さんから今回の旅行予定の概要と予約確認書が送られてきた。予約確認書を見ると、(株)ケイ・アイ・エス インターナショナルの早割45適用！ ガルーダ航空利用バリ島8日間の旅（サヌールパラダイスホテル泊）ツアーに参加する形になっていた。早速、必要事項を書き、旅行会社にパスポートの写しと一緒に送付した。山本さんは撮影のみということなので、採集者が西條さんと森さんの2名、撮影者が山本さんと私の2名ということになる。なお、4人の予定調整から、4月10日頃の出発予定は、ひと月遅れの5月10日からに変更になった。

「地球の歩き方・インドネシア」を購入して、調べて見ると、バリ、スラウェシとも、11月～3月が雨季、4月～10月が乾季であるが、雨季と乾季の境目は比較的なだらかであるとのこと、また、インドネシアは赤道直下の国なので1年を通して暑いが、高地では朝夕は冷え込むとのことであった。今回の旅行では、バリ島の高地、ブドゥグルへも行くことになっている。熱帯だから暑いのは承知しているが、寒い時に着る服も1枚用意しておいた方がいいかなと思った。また、旅行には、比較的、天気安定している乾季の方がいいということも書いてあった。



マカッサルのホテルパンダイカプラにて  
後列左:山本さん 右:筆者  
前列左:西條さん 右:森さん

## ■ 5月10日（火） バリ・デンバサルへ

前日の夕方、関西空港で西條さんと待ち合わせ、前夜は「関西空港ホテル日航」に宿泊した。

関西空港の待合室で森さんにお目にかかる。もらった名刺を見て、ダンス教室の先生であることを知った。森さんは、「むし社」のパプアニューギニアツアーにも参加したとのことで、文字通り、蝶を求めて、世界中を旅しておられるようで、なかなか気さくな方だ。

空港でビザ代（25米ドル）を支払い、ガルーダインドネシア航空883便に搭乗する。エンジン音が高くなり、ジェット機が動き始めた。関西空港を定刻の午前11時に離陸。どんどん高度を上げる。ジェット機は、気流の安定している1万メートル以上のところを水平飛行して飛ぶそうだが、しばらくして、窓に霜のようなものが貼りついているのに気がついた。機内は適温だが、おそらく高度1万メートルを超え、機外は氷点下なのだろう。窓から外を見ていると、進行方向と反対に白い雲がゆっくりと流れていく。午後2時半頃、眼下に島がいくつも見えたので、フィリピンの上空あたりかなと思った。インドネシア語の機内放送の後に、「当機は、ただいま高度4万フィート上空を順調に飛行しておりますが、これからバリ・デンバサルにかけて徐々に高度を下げてまいります。なお、ただいまのデンバサルの天候はくもり、気温は摂氏30度、時刻は3時55分でございます。デンバサル時間は、日本時間より1時間遅れております。それでは、残りわずかのお時間となりましたが、引き続きデンバサルまでの空の旅をお楽しみください。」と、機内放送があった。日本とデンバサルとの時差は1時間、何だか1時間、得したような気分だ。

空港には、日本時間で午後5時27分（現地時間4時27分）に着陸した。空港で各自の荷物を受け取り、外に出ると、ガイドのインドラ君が出迎えに来てくれていた。インドネシア人であるが、流暢な日本語を話す好青年で、蝶のこともよく知っている。インドラ君の運転する車で、サヌールのパラダイスプラザホテルに向かう。サヌールは、バリ島のリゾート発祥の地で、欧米人のリピーターが多いそうである。ホテルまでは、約50分の道のりであったが、道路を走るバイクの数の多さには圧倒された。2人乗り、3人乗りのバイクも多く、また若い女性や子どもを乗せたバイクが多いことも、日本とは異質な感じを受けた。ホテルの前に着くと、地雷検知器のようなものを持った、ガードマンが車をチェックする。以前、バリで爆弾テロ事件があったことから、このように検問するようになったのだろう。

ホテルにチェックインした後、4階の個室に案内された。部屋数は多く、なかなか立派なホテルである。夕方、「チュー



サヌールの道は2人乗り、3人乗りのバイクが多い

イン、チューイン」と何度となく、変な鳴き声が聞こえるので、その鳴き声の主を探してみた。鳴き声のする方向にキジバトのような鳥がいたので、この鳥かなとも思ったが、遠くてよく分からなかった。今まで聞いたことのない鳴き声に、異国に来ていることを実感するのであった。

#### ■ 5月11日（水）スラウェシ、マカッサルへ

午前6時50分発のガルーダ航空便でマカッサルへ行く予定であったが、何らかの理由でライオン航空の午前10時30分発883便マカッサル行きに変更になってしまった。同じ路線でもガルーダ航空とライオン航空とでは運賃にかなりの差があるそうで、ライオン航空の方が安いのが（サービスはガルーダ航空の方が良いらしい）、変更の理由なのかも知れない。

ホテルでバイキングの朝食の後、午前8時30分にホテルを出て、両替所へ立ち寄る。ここでは、5万円を両替したが、この日のレートは105.20であった。5万円が500万ルピア以上に替わり、分厚い札束に何か大金持ちになったような気がした。ちなみに、インドネシアでは、日本の1万円札に該当する紙幣はなく、千円札に該当する10万ルピアが一番高額紙幣である。バリでは、労働者の平均月収が1万5千円～2万円位だそうで、物価が安いのもうなずける。

デンバサルから1時間余りのフライトでスラウェシのマカッサルに到着した。空港では、現地に滞在して真珠養殖の仕事をしている永井さんと、現地ガイドのルディー君が迎えてくれ、一緒に昼食をとることになった。注文して出て来たのは、メンの上に肉を載せて、それにだしをかけて食べるソバみたいなもので、ピリッと辛味が効いていてなかなかの味だった。

昼食の後、マカッサルのホテルパンダイカプラにチェックインした。どこか、蝶を探しに行きたかったが、近くでは適当な場所がないということだったので、あきらめて、山本さんと一緒にベチャ（前の所に人を乗せられるように改造した自転車）に乗せてもらって、近くを散策することにした。永井さんが、見晴らしのよい海浜公園のような所に案内してくれた。ここ、マカッサルは、海沿いに開けた都市のようだ。子ども達が4・5人、海に浮かぶ船のロープにぶら下がって遊んでいる。海は深そうだが怖くないのだろうか。頭にベールをかぶっている女性が目立つ。宗教的なものだが、この暑いのに・・・とってしまった。西條さんと森さんは、旅の疲れ



船のロープにぶら下がって遊ぶ子供達

を癒すためにマッサージに行ったそうである。

晩はホテルの船上レストランでディナーショーを楽しんだ。船上レストランから海の方を見ると水面に浮かぶ街の灯りが幻想的であった。

#### ■ 5月12日（木） ライアへ

いよいよ待ちに待った撮影初日。総勢7名になったので、2台の車に分乗してホテルを出た。混雑している市内を抜け、バンティムルンの方へと車を走らせる。だんだん道が細くなり、山が見えてきた。山が迫ってきたところで、オオルリオビアゲハ (*Papilio blumei*) のマークを見つけたので、インドラ君に聞くと、ハイスクールのマークだと言う。バンティムルンは、もうすぐのようだ。オオルリオビアゲハは、大型の美麗種で、おそらくスラウェシの蝶の中で、最も有名な蝶であろう。ただし、バンティムルンでは、この蝶は少ないそうである。また、スラウェシに産する蝶の約半数は、固有種だそうだ。

バンティムルンの公園を通り過ぎ、車は山道を上っていく。水たまりで吸水している蝶を見つけ、車を止める。ミロンタイマイ (*Graphium milon*) だ。アオスジアゲハに似ているが、青い帯が細いことで見分けられる。そして、今日の最初の目的地、ライアに着いた。ここは、標高550メートル位で谷川を遡って行くポイントだそうである。谷川沿いの小道に分け入る。まず、出迎えてくれたのは

アカスジベッコウトンボ。(カラー写真A) 真っ赤な羽が特徴的なトンボだ。

このトンボは、熱帯では普通種のように、他でもよく見かけた。小道がなくなったので、谷川の石の上を伝うようにしながら進んで行くと、砂地で吸水しているチオネウスイシガキチョウ (*Cyrestis thyonneus*) (カラー写真B) を見つけた。

レンガ色に黒の縞模様が入ったイシガキチョウだ。あたりを見渡すと、あちこちで吸水している。赤茶色をしたチャイロタテハ (*Vindura erota*) も吸水していた。時々、かなりのスピードで谷川の上を行ったり来たりしている蝶がいるが、止まらないことには撮れない。この蝶を西條さんがネットしたので見せてもらったところ、コゲナタフタオ (*Polyura cognate*) であった。



吸水するミロンタイマイ



西條さんがネットしたコゲナタフタオ

12時過ぎ、みんな、河原に集合して、途中で買った、お弁当を広げて食べ始める。コフキショウジョウトンボ（このトンボは、石垣島で何度か見ている。オオシオカラトンボにショウジョウトンボのシッポをつけたような南国的なトンボ）がいたので、ビデオに撮っていたら、「あっ、マダラシロチョウだ！」と、西條さんの声が聞こえた。見ると、シロチョウが、弁当のご飯に止まっているではないか。ご飯は、黄色に着色されていたが、この蝶を引きつける何らかの物質が入っていたのであろうか。（永井さんによると、この蝶はマダラシロチョウではなく、ウスムラサキシロチョウの近縁種とのことであった。）

## ■パンギアへ

次に、今来た道を引き返し、第2のポイント、パンギアに向かう。山道を下って、40分位でパンギアに着いた。ここは、標高350メートル位で、以前、自民党の鳩山邦夫氏が蝶採集に訪れた場所だそうだ。ここも川筋を遡って行くポイントだが、先ほどと違って水はほとんど流れていない。川筋を下るようにゆっくり飛んできた蝶をインドラ君が、ゲット！ 新鮮なオオルリマダラ (*Euploea westwoodi*) (カラー写真C) だった。ネットから、蝶を取り出し、指で胴体のところを持つと、時々、ヘアペンシルを出す。



オオルリマダラをゲットしたインドラ君

みんな、川原に降りて行ったが、ネットを持った人達と一緒に行動しては、なかなかじっくり写真が撮れないので、林の方に行ってみた。林に入ると、開けた場所があり、こげ茶色の蝶が飛んでいる。目で追うと、ランタナの花にとまり、吸蜜し始めた。この蝶は、イワサキタテハモドキ (*Junonia heedonia*) であった。日本では、時々、迷蝶として話題になる蝶である。先に進んでいくと、いくつもいるではないか。

すぐそばをキチョウが飛んでいる。何だか、ちょっと、普通のキチョウとは違うような気がしたので、しばらく見ていると、マメ科植物にまとわりつくようにして飛んでいる。そして、マメ科植物に止まると、腹部を曲げて産卵する。前翅の後ろに黒いふちどりのある（だから、普通のキチョウとは違って見えたのだ。）トミアキチョウ (*Eurema tominia*) だった。

林を出て、元の場所に戻り、川原の横の小道を歩いて行くと、キシタウスキシロチョウ (*Catopsilia scylla*) がいた。この南国的な蝶は、石垣島で発生したことがある。後翅の黄色が鮮やかだ。この蝶も、マメ科と思われる植物に、まとわりつくようにしながら飛び回り、時々、止まっては産卵していた。



川原に降りると、水たまりの横に、ミロンタイマイの死骸が散乱している。その横で一頭のみロンタイマイが吸水していた。しばらく、ミロンタイマイを撮っていると、すぐ横の民家から、赤いネットを持った少女が現れた。このトラップは、この少女が作ったものらしい。少女の視線の先を見ると、白斑のある大型の蝶が葉上に止まっている。時々、飛び立っては、また、葉上に止まる。わりと、ゆっくり飛び、シロオビアゲハの赤班型のようにも見えたが、逆光なのでよく分からない。そして、また、飛び立った瞬間、蝶は赤いネットに吸い込まれた。ネットを振ったのは、少女ではなく、インドラ君だった。下の方から、川筋を上って来ていたのだ。ネットから取り出された蝶を見ると、ホソバハレギチョウ (*Cethosia myrina*) だった。見る角度によって、赤色が紫色に変化する、とても魅力的な蝶だ。



見る角度によって、赤色が紫色に変化する  
ホソバハレギチョウ

小道に戻り、しばらく行くと、大きなフンが落ちている。ここに来るまでに、何度か、牛を見ていたので、牛のフンだろうと思った。そのフンの上で、動いているのはタマオシコガネ (フンコロガシ) で、フンを丸めてダンゴにしようとしているところだった。胴体は黒だが、触角は黄色だ。多分、ファーブルが観察したものに近い種類であろう。

さらに先に進んで行くと、地面に止まっている蝶がいる。地面に落ちている、果実のようなものから、さかんに吸汁している。アイーテスオオイナズマ (*Lexias aetes*) であった。さらに小道を進んで行くと、屈強そうな男達が、二人で太い丸太を担いで降りて来た。近くで木を伐採しているようだ。まだまだ、道は続いているが、2時を過ぎていたので、引き返すことにした。

先ほどのフンのところに戻って来たので、フンコロガシの様子を見てみると、フンダンゴは完成までもう一息というところだった。もう少し見ていたい気もしたが、そろそろ、みんな集まっているころだと思い、ここを離れた。

小道を下って、橋のところまで戻って来ると、永井さんと西條さんがいるが、他の人はまだである。橋の上から川上の方を見てみると、コモンタイマイ (*Graphium agamemnon*) が飛んで来た。緑の斑紋が美しい。この蝶は、与那国島で発生したことがある。飛翔が速いので、この蝶を撮るには吸蜜か吸水の時を狙うしかないであろう。

森さんが、なかなか戻って来ないので、インドラ君が様子を見に行く。しばらくして、一緒に戻って来た。蝶を追って、かなり奥の方まで行かれていたようだ。話を伺うと、蝶のおとりトラップはいくつも仕掛けられているとのこと、また、木の周りを旋回していた、

コモンタイムイの1ペアと、キシタウスキシロチョウの1ペアをゲットしたとのことであつた。

バンティムルンの広い駐車場のあるところに戻り、みやげ物などを売っている店をのぞいてみる。蝶の標本を額に入れて、売っている店がいくつもあつた。スラウエシにはないはずの、オオルリアゲハやミイロタイムイの入っている額もあつたが、熱帯の蝶はどれもカラフルだつた。午後6時近くに、ホテルに帰着。夕食は、永井さんの案内で、「將軍」というところで、久しぶりに日本食を食べた。

■ 5月13日(金) バンティムルンへ

8時過ぎにホテルを出発。この日は、採集組と撮影組とに分かれて行動することになった。ちなみに、バンティムルン(カラー写真D)は、採集禁止になっている。我々3人(山本さん、永井さん、私)は、バンティムルンの方に向かって車を走らせる。公園の手前で蝶の飼育ケージを見せてもらおうとハリフロンキシタアゲハ(*Troides haliphron*)がいた。しばらく見学した後、外に出ると、ヘレナキシタアゲハ(*Troides Helena*)



飼育ケージのハリフロンキシタアゲハ

(カラー写真E)が飛んでいるのではないか。あたりを飛び回っているので、ビデオに撮っていると、時々、つる性植物に近づいては産卵しているようである。つる性植物は、食草のウマノスズクサ類なのだろう。写真も撮つたが、産卵は一瞬で、すぐ飛び立ってしまうので、シャッターを切るのは難しかった。

バンティムルンの公園駐車場に車を止め、車外に出ると、ランタナで吸蜜しているキシタウスキシロチョウがいた。ランタナの花は、多くの蝶が好むようだ。ここから、谷川に沿った道を行く。谷川の水の音が聞こえるが、林の木々にさえぎられているので谷川は見えない。しばらく行くと、全身黒づくめの、カワトンボのようなトンボがいた。近づいて観察すると、翅の先端は白い。先に進んで行くと、このトンボがいくつも飛び出してくる。



翅の先端が白いスキバハナダカトンボの♀

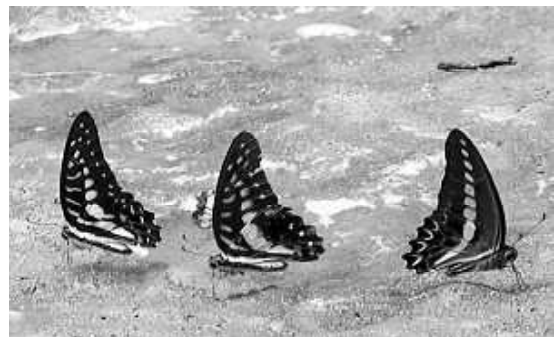
ハレギチョウ(*Cethosia biblis*)が

葉の上に止まって、翅を開閉している。先に進んで行くと、ジャノメチョウのような蝶が飛び立った。そして、降りたあたりを探してみると、何か実のようなものから吸汁している。この蝶は、メナドヒメワモン (*Fanius menado*) であった。(カラー写真F) ビデオに撮っていて、この蝶の眼の色が緑色をしていることに気がついた。これまで、蝶の眼の色に気をとめたことなどなかったが、こんな眼の色をした蝶は他にもいるのだろうか。

林の中の細い道を進んで行くと、開けた場所に出た。すぐそばが谷川だったので身を乗り出すようにしてのぞいてみると、小さいトンボがいる。胸部から腹部にかけて、黒にコバルトブルーの斑紋のある、美しいトンボであった。このトンボ、今回の撮影行で、ぜひ見たいと思っていたトンボである。それは、ネットでバンティムルンの川に、このトンボが産することを知っていたからである。スキバハナダカトンボという、ハナダカトンボの一種であった。このトンボを見て、途中で見た黒づくめトンボは、スキバハナダカトンボのメスであったことに気がついた。ここから先は、橋を渡らないと行けない。丸太が3本、架けられているだけの橋である。川幅は8メートル位、水面からの高さは3メートル位であろうか。谷川はそんなに深くないようだが、急流である。なるべく下を見ないようにして渡り、しばらく行くと、永井さんと山本さんの姿が見えた。

谷川のそばの砂地で、たくさんの蝶が吸水している。ミロンタイマイ、ミカドアゲハ、デューカリオンタイマイ (*Graphium Deucalion*) の *Graphium* 類、チャイロタテハ、それにシジミチョウも何種類かいる。

写真を撮っていると、永井さんがミカドアゲハは2種類いることを教えてくれた。1つは、ミナミミカドアゲハ (*Graphium eurypylus*) で東南アジアに広く分布する種類、もう1つは、メエリミカドアゲハ (*Graphium meyeri*) で、こちらの方はスラウェシの南西部にしかない、珍しい種類とのことであった。吸水では、ほとんど翅の裏面しか見えないが、見分けるポイントを教えてもらったので、裏



左からメエリミカドアゲハ、ミナミミカドアゲハ、ミロンタイマイ

面で見分けられるようになった。蝶をビデオに撮っていると、後ろから、「あっ！」と、永井さんの声が聞こえた。何かと思って振り返ると、永井さんの横に、赤いネットを持った捕り子の少年が立っていて、何か珍しい蝶を捕まえたようである。少年がネットから取り出した蝶は、新鮮なオオルリオビアゲハ (*Papilio blumei*) であった。ルリ色の帯が金緑色に輝いている。

永井さんに交渉してもらって、その蝶を5万ルピアで買った。少年から蝶の吸水ポイントを譲ってもらった分と合わせて10万ルピアになるので、永井さんを通じて、少年に10万

ルピア紙幣を渡したところ、「こんなお札は見たことがない。ニセ札だろう。」と、少年が言っているとのことだった。少年には、10万ルピアは十分過ぎる大金であったのだろう。その後、インドネシア語なので、永井さんと少年のやりとりは分からないが、10万ルピア紙幣がニセ札でないことが分かったのであろう。少年は紙幣を受け取り、嬉しそうな顔をしていた。

胸を押されて仮死状態になっている、オオルリオビアゲハ(カラー写真G)を砂地に置いたり、永井さんの手に乗せてもらったりして撮ってみた。抜群にきれいな蝶であることは間違いないが、やはり、やらせ写真ではもう一つという感じがした。

道はまだまだ続いているようであったが、ここで引き返すことにした。先ほどの丸太の橋を渡ってから谷川の方を見ると、川面を滑るように走ってい



抜群にきれいなオオルリアゲハを手にする永井さん

くトカゲがいた。何というトカゲなのだろう。さっきのトンボはいないかなあと思いながら谷川沿いを探していると、2匹のトンボがもつれ合うようにして飛んでいるではないか。スキバハナダカトンボだった。見ていると、ゼフィルスの雄がもつれ合うように似ている。どうも、なわばり争いをしているようであった。そして、そのうちの1匹が岸に引っかかっている木の枝に止まったので、そのトンボを撮っていると、突然、別の種類のトンボが現れた。スキバハナダカトンボより一回り小さく、胸部は薄いグリーン、腹部は薄茶色、額片が高く、翅は尻尾よりも長い。種名は分からないが、こちらも明らかにハナダカトンボだ。(カラー写真H) このハナダカトンボは、ヘリコプターのように、時々、2匹が向き合って、空中で静止する。これもなわばり争いののだろうが、おもしろい光景だった。

小道に戻り、帰り道を急ぐ。オオアサギシロチョウがいた。この蝶のあさぎ色もいい色だ。公園の駐車場のあるところに戻り、公園のレストランでちょっと遅い昼食にする。それから、車に乗って、飼育ケージのあるところに行った。アカスジベッコウトンボが群れている。ここでは、普通種のような。日陰になっている道路上に、アエテスオオイナズマがいた。吸水していて、近づいてもほとんど逃げないので、じっくり撮ることができた。

帰りは採集組の人たちと合流し、公園のレストランでアイスコーヒーを飲みながら疲れを癒した。



A. アカスジベッコウトンボ



B. チオネウスイシガケチョウ



C. オオルリマダラ



D. バンティムルン



E. ヘレナキシタアゲハ



F. メナドヒメワモン



G. オオルリオビアゲハ



H. 2種類のハナダカトンボ

《まつだ としろう 920-2133 白山市鶴来大国町ホ94-5》

## 会員の動き・しゃばの動き

### ■猛暑の中のシルビアシジミ

シルビアシジミが飛び交う海岸は、8月の晴天時は40度以上にもなり、日傘を差していても長時間立っていると頭がボ～としてくる。そんな炎天下でも、シルビアは日向を元気に飛び回り、止まってくれない。

### ■今年はセミの当たり年

山は、何処へ行ってもエゾゼミ類の大合唱。これまで何処に居るのかと必死に探していたアカエゾも、標高800m付近へ行くと鳴き声が聞こえ、標高900mを越すとコエゾがやかましくなる。白山の標高は2702mだが、頂上付近でもコエゾが鳴いていた。

### ■医王山のヒサマツミドリシジミ

2002年に成虫が初採集された医王山のヒサマツ、今年の採集数は多いようで、うわさ話をまとめると10頭にとどまっているかも。

### ■アサギ再捕獲マップ

石川県で行われてきたマーキングの成果が一目で分かるページが、蝶談会HPにできた。北川氏の労作で、グーグルマップ上に再捕獲記録の出発地と再捕獲地が示されている。マップを拡大するにつれ、こんなに多いのかと思うくらいにポイント数が多く、最大限に拡大すると、実際の場所とは多少ずれているのは、ご容赦願いたい。

### ■猛暑の年はムラサキシジミ

気温が高いとムラサキシジミの観察も多いようで、各地で幼虫や成虫が観察されている。中宮温泉では、まるまる太った終齢幼虫がコナラにベタベタで、成虫も飛んでいた。

### ■セミも木から落ちる

ブナの幹を大きな声で鳴きながら歩いていたエゾゼミ、次の瞬間消えたかと思ったら、根際から大音響が聞こえてきた。枝先を上手に動き回るエゾゼミも、幹となると勝手が違ったようで、落ちて根際で鳴き出すとは、照れ隠しのつもりか。

### ■トイレのミヤマカミキリ

早朝、道路脇のトイレに車を止めると、ミヤマカミキリが目に入った。そこかしこに居て、トイレの中にもベタベタ止まっている。オスメス合わせて40を超え、虫好きには好ましい光景だが、一般人には受け入れがたく、駆除隊が出動したかも知れない。

### ■トゲナナ元氣

年越しで飼育しているトゲナナフシ、昨年は7月11日までに全てが死んでしまったが、今年はいたって元氣。40度の気温にも耐えて記録を更新しているが、室内飼育から野外飼育に切り替えたのが良かったのかもしれない。

### ■暑さに参ったシラキトビナナフシ

ナナフシの中で、最も寒冷な場所に生息するシラキトビナナ、トゲナナと同様の環境で飼育していると、あれよあれよと死んでしまい、気温が40度にまで上がった日に、全てが死んでしまった。今年生まれの元氣バリバリだったが、猛暑には勝てなかった。

### ■アカエゾゼミが大当たり

今年、エゾゼミ類が大当たりで、曇っていてもいっぱい鳴いている。アカエゾも大当たりで、これまで一声聞いても飛び上

がり、二声聞ければ涙が出るほど嬉しかったが、今年は標高800m付近の谷筋へ行けば鳴き声が聞け、新産地がいくつも見つかった。

### ■ハートを探せ

「無い」「ワンコの足跡」「ハート6個の大当たり」。アサギマーキング会の会話だが、後翅裏面のハートマークをご存じだろうか。今は、こんな事でも騒いでいる。

### ■トゲナナ大往生

元気なように見えたが産卵数が次第に落ち、9月に入ると産卵しなくなり、10日には、あたかも生きていたかのように姿で、死んでいた。

### ■マーキングに燃えていた

9月になると、たとえ大雨が降っていても宝達山へ行き、いつでもマーキングできるようにと、雨が止むのを待っていたが、同じ事を考える人はいるもので、近頃のマーキングは、お任せ状態になっている。

### ■アサギマダラの携帯ストラップ

宝達山に飛来するアサギマダラをイメージしたペンダントを宝達志水町が作成。シ

ンボルバッチとして町職員が着用するとともに、携帯ストラップ用として「山の龍宮城」で販売されている。一個450円。

## ■ 例 会 の 記 録 ■

8月4日(木) 浅地メッキ2階にて、午後8時から開催。

今年は、エゾゼミ類が大発生しているので、エゾゼミ3種の聞き分け方を松井氏が紹介。人の耳での聞き分けは難しく、録音した鳴き声を、パソコンを使って目で見分ける方法を、実際にパソコンを使って紹介。

松田氏は、ヘレナの産卵シーンなどもあるスラウェシ撮影紀行を、ビデオ映写。

その他の話題は、暑さにめげないシルビアシジミ、ムラサキシジミが大量産卵、ムラサキシジミの終齢幼虫がベタベタ、アカエゾゼミの変った生態、直ぐそこまで来た石川県未記録のラミーカミキリ、ミヤマカミキリ大発生、翅が1枚小さいオニヤンマ、などなど。

参加は、松田、松井、浅地、浅野、大宮、井村、山岸、長田、の8人。

## ■ ■ 表紙デザイン：小幡英典 ■ ■

## 目 次

浅地哲也：チッチゼミの産卵に遭遇	1
松井正人・三坂岳應：白山ハイマツ帯でコエゾゼミを観察	2
松田俊郎：バリ・スラウェシ撮影紀行(上)	3
編集部：会員の動き・しゃばの動き	13

## 翔 212号

Tobu 2011年10月10日発行  
百万石蝶談会  
金沢市大場町東871-15 松井方

<http://homepage3.nifty.com/100man/>  
☎920-3121 ☎076-258-2727  
郵便振替 00750-8-562  
印刷 小西紙店印刷所



撮影/浅地哲也

